

67-1 「行徳札所」寺歩き（距離約 10.0km）



徳願寺

行徳の地名の起こりは、大永7年（1527）金海法印という山伏が、伊勢内宮の土砂を中州（江戸川区東篠崎町辺り）の地に運び、内外両皇大神宮を勧請して、神明社を建立したことに始まり、その金海法印が土地の開発と、人々の教化に努め、徳が高く、行いが正しかったことから多くの人から「行徳さま」と崇め敬われたことからといわれている。

その行徳には、江戸時代から明治年間まで、行徳・浦安に「行徳札所」と呼ばれる三十三ヶ所の観音霊場があった。行徳の札所めぐりは、江戸時代後期の江戸の市民にとって、塩浜見物や潮干狩りを兼ねた近郊レジャーコースのひとつに加えられ、盛んになっていったという。

権現道、内匠堀などといった行徳の昔をたどりながら、「行徳札所」の寺巡りをする。

【道順】

東京メトロ東西線南行徳駅から始めて、どれだけの寺社や施設をめぐることができるかマークしてみる。

南行徳公園、27 新井寺、28 延命寺、26 了善寺、香取神社、今井の渡し、日枝神社（ケヤキ）、行徳街道、内匠堀、24 源心寺、胡録神社、24 善照寺、香取神社、23 円明寺、22 法伝寺、清水神宮、稲荷神社、21 光林寺、旧うどん屋「笹屋」、中山こんにやく、丸京味噌、鷹匠、常夜塔、田中邸、馬頭観音、おかね塚、20 清岸寺、豊受神社、伊勢宿、後藤神輿、17 教信寺、19 徳蔵寺、加藤邸、浅子神輿跡、豊受神社、稲荷神社、権現道、八幡神社、ギャラリー「田中屋」、正讚寺、15 浄閑寺、円頓寺、妙覚寺、14 法善寺、13 法泉寺、常運寺、3 長松禅寺、成田街道、4 自性院、5 大徳寺、神明神社、妙頂寺、妙応寺、寺町通り、徳願寺、稲荷神社、正源寺、胡録神社、春日神社、養福院、妙好寺、八幡神社、清寿寺、春日神社、レンガ造りの蔵

東京メトロ東西線妙典駅で終える。

【町歩き解説】



行徳街道清岸寺前鍵曲り・胡録神社鍵曲り

・権現道

徳川家康が関東を治めるようになると、家康は行徳の塩業を重視し、行徳を直轄領（天領）として治めた。家康は、千葉東金に狩猟に出かけたが、その時船橋に御殿を造り、そこを中継地点として休憩、宿泊に当てた。そのおり塩業関係者を御殿に集め「塩は軍用第一の品、領内壱番の宝である」といって多額の奨励金を与えたという。

家康はさらに、行徳で生産された塩を直接江戸へ運ばせるため、隅田川から中川、そして江戸川へと運河をつくらせた。

その東金へ鷹狩に行く際に、江戸から船で今井の渡しに着き、行徳を通過して船橋へ行くときに通った道筋を「権現みち」と呼んでいる。この道は、行徳街道が出来る以前の古い道で、現在は途切れ途切れとなっているが、南行徳方面では内匠堀に沿って北上している。関ヶ島から法泉寺本（行徳7-22）に至る間は道幅2mの道が残っている。



本久寺手前権現道・南行徳小前内匠堀跡

成田道

江戸から成田へ通じる道はいくつもあったが、多くは陸路二つと海路一つのどれかを利

用した。佐倉藩主が参勤交代につかった千住を經由して水戸街道の新宿でわかれる公式ルート、日光街道浅草橋から両国橋を渡り、豎川通りを東進する「元佐倉道」、そして日本橋小網町から船に乗り、小名木川、新川の掘割水路を利用して本行徳へ上陸し、行徳街道から寺町通り、そして妙典から船橋海神で、成田街道本道に合流するルートである。後者は、江戸小網町の行徳河岸から船に乗って江戸川河口の行徳で上陸船旅が魅力で、最も人気が高かった。

伊勢宿から二つ目の鉤の手を通り越したところで、左にはいる道の突き当たりに、行徳のシンボルである常夜燈が立っている。ここが日本橋小網町との間を往復していた行徳船の発着場である。

・内匠堀

行徳では、塩田の開発に力が注がれていたが、一方では田畑の開墾にも目が向けられた。

しかし、行徳は砂州で形成されているために、真水を得ることが困難だった。この困難を克服して大柏川から浦安に通じる灌漑用水路(田畑に水を引くための水路)ができた。これを内匠堀、別の呼名を浄天堀という。

・行徳領内三十三観音札所

江戸時代から明治年間まで、行徳・浦安に「行徳札所」と呼ばれる三十三ヶ所の観音霊場があった。この札所は元禄三年(1690)、徳願寺の十世覚誉上人が起願し、自ら三十三体の観音菩薩の尊像を刻んで行徳領内の三十二ヶ寺に分け、西国札所を模したのが始まりだったという。そのことから、徳願寺を皮きりに、河原・稲荷木・高谷を回り、行徳街道を南下し南行徳、浦安に至り、堀江の大蓮寺を結願とする行徳領内を「のし」の字を描くような札所めぐりである。

行徳札所は、江戸時代の中、後期江戸住民をはじめ、佐倉や印西・成田・木下・千葉など下総各地からたくさんの巡礼が訪れてきたが、明治の後半になって急速に衰え、消滅してしまった。

・徳願寺(の見どころ)

・本尊の阿弥陀如来像

鎌倉時代のはじめ、源頼朝の妻北条政子が霊夢をみて仏師運慶に命じて彫らせたもので、政子の念持仏といわれている。

・山門と鐘楼

当寺最古の建物で、安永4年(1775)に建立された。

・宮本武蔵の供養塔

山門を入れてすぐ左横にある石の地藏菩薩がそれである。

・永代橋水難横死者供養塔

・円山応挙の幽霊の絵

応挙が旅の途中に、たまたま行徳の旅籠「志がらき」に泊り、夜中に廊下で胸を病でいた同家の主婦とばったり出会ったときの驚きがきっかけで、描かれたといわれる。毎年11月16日の午後3時頃に限って一般公開される。

・妙好寺（の山門）

妙好寺の山門は、1761 年造の和様四足門として市内に残る江戸期の貴重な建造物の一つである。隣接する八幡神社本殿の彫刻もまた優れたものである。



妙好寺の山門・常夜灯

・常夜灯

行徳は古くから塩の産地として知られ、この塩を江戸へ運ぶために開発された航路も、やがて人や物資の輸送に使われるようになった。寛永 9 年(1632)この航路の独占権を得たのが本行徳村だった。新河岸と呼ばれたこの船着場から江戸日本橋小網町までの間を往復した就航船を「行徳船」または「長渡船」と呼んだ。行徳船を利用した人たちには、松尾芭蕉、十返舎一九、小林一茶、渡辺華山、大原幽学など、歴史上、文学史上に著名な人物も多く、特に文化・文政(1804~30)の頃からは、行徳を訪れる文人墨客や、当時ますます盛んになってきた成田山参詣の講中（信者の仲間）たちによって、船着場は賑わいを極めた。この常夜燈は、文化 9 年(1812)江戸日本橋西河岸と葺屋敷の講中が、航路の安全を祈願して成田山新勝寺に奉納したもの。正面の裏面に「日本橋」と筆太く刻み、左側に「永代常夜燈」、右側に「文化九壬申年三月吉日建立」と刻み、台石には「西河岸町太田嘉兵衛、大黒屋太兵衛」ほか 21 名の氏名が刻み込まれている。



笹屋うどん店・成田道木造家屋

・笹屋うどん

行徳の名物に「笹屋うどん」と「中山こんにやく」があり、「中山こんにやく」は中山の法華経寺周辺で売られていたが、その製造元は行徳 1 丁目の街道筋で看板を軒に出して製造していた。笹屋うどん店は、安政元年(1854)の建物がそのまま残っている。当時旅人が船を待つ間に笹屋でひと休みして、土産に干うどんを持ち帰ったといい、江戸末期に店の宣伝として描いた、太田蜀山人が書いたとされるケヤキの大看板も残されている。

・行徳神輿

行徳の町で神輿が作られたのは、江戸中期頃からで、堅牢な神輿が有名になって、神輿づくりが盛んになった。その神輿の商談に欠かせないものが、行徳の塩だった。造られた塩が新潟、長野などの山間部へと運ばれていく時、神輿製作の依頼も受けてきた。

かつて、浅子神輿店（浅子周慶）、後藤神仏具店（後藤直光）、中台神輿製作所（中台祐信）三軒の神輿店があった。今は中台のみ営業。

・田中邸

行徳街道（本行徳 3 丁目）にある田中家は、350 年前から続く旧家で、家屋は明治 10 年築の木造・瓦・二建て。先代行徳の塩場師（シヨバシ）で、行徳町公選の初代町長だった田中稔さんが建てた。玄関は昔ながらの格子戸作りに土間のタタキと、古き時代の生活様式が残っている。

ルートマップ (その1)



ルートマップ (その2)



**** オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu ****